

# Educo

地球時代の教育情報誌 エデュコ

No.27

2012年 冬

## 2 | 巻頭インタビュー

「はやぶさ」プロジェクトマネージャー

# 川口 淳一郎さん

### 4 | 知っておきたい教育 NOW

生徒の「夢の扉」を開くキャリア教育

佐瀬 順一

国語はコミュニケーションも学ぶ科目

片桐 史裕

### 8 | きょういく見聞録

協働する力 東京学芸大学教職大学院での学びを通して

上野 和広

### 10 | 地球となかよしトピックス

思考力・判断力・表現力を育てる

ひろしま型カリキュラム「言語・数理運用科」

広島市教育委員会

### 12 | インフォメーション 北から南から

### 14 | 第9回 地球となかよしメッセージ

入賞作品発表

### 18 | 地球となかよしゼミナール

翔んでいけ！どこまでも続く青い空へ  
～ヤゴ救出大作戦～

東久留米市立第九小学校

### 19 | コラム いまどきコドモ事情

受験 だいじょうぶ、だいじょうぶ  
香山 リカ

### 20 | ほっとな出会い

プロゴルファー

村口 史子さん

宇宙航空研究開発機構(JAXA)教授 / 「はやぶさ」プロジェクトマネージャー

かわぐち じゅんいちろう

川口 淳一郎さん

# 既存のものを学ぶだけでなく 新しいものに気づく能力を 大切にしたい

「はやぶさ」プロジェクトは、前人未踏の「小惑星サンプルリターン」を目的に立ち上げられたんですね。

「はやぶさ」のプロジェクト始動は二十数年前です。設計段階では形は見えない。実際に形になるのは打ち上げの間際です。シナリオを描き、デイスカッションを重ねて、今までにないものをつくり出していく。まさに「創造」で、この喜びが最も大きいですね。

「はやぶさ」プロジェクトでは、「加減法」での評価にこだわりました。「失敗したから減点」ではなく、達

成できたことの得点を積み上げる方法です。今までだれもやったことがないことに挑戦する場合、減点を恐れて「しない」のは、何を生み出さないことになるからです。

教育においても、加減法で評価する面がもつとあってもいいのではないかと思っています。教えられたものを覚えていないから減点、というだけではなく、どれだけ自分から調べて、新しい着想を得たかを評価するということです。「どれだけ学んだか」だけでなく、「どんなことを自ら発見できたか」ですね。それが、科学技術の発展、創造へのシナリオ

を描くためには、欠かせない能力なのです。

「はやぶさ」帰還以来、多くの学校でも講演し、科学技術の話も多くなりましたが、生徒さんたちは皆、一所懸命メモをとり始めるんですね。きちんと材料を受け止める力があるのはわかります。ですが、メモをとる時間があったら、そこから何かを考えることに労力を使ってほしい。それが、未来を切り拓く力につながると思っています。

「創造」する力をはぐくむには、どんなことが大切なのでしょう。



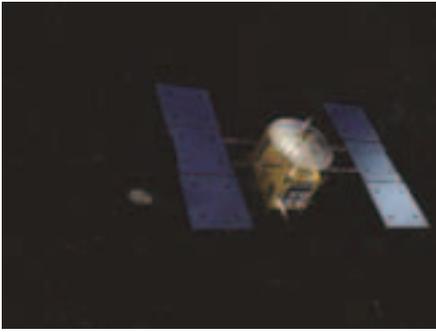
PROFILE

川口 淳一郎

1955年青森県生まれ。県立弘前高校、京都大学工学部卒業、東京大学大学院工学系研究科航空学専攻修了。ハレー彗星探査機「さきがけ」「すいせい」、火星探査機「のぞみ」などのミッションに携わる。著書に「はやぶさ、そらまでして君は～生みの親がはじめて明かすプロジェクト秘話」(宝島社)、「「はやぶさ」式思考法」(飛鳥新社)など。

日本の教育は、既にあるものを「学ぶ」とどまってきた面があると思います。学びはもちろん大切なことに違いないのですが、既存のものを学んで満足しては、新しいことを生み出す力につながりません。

学んだことからどんなインスピレーションを得るかですね。そして、私が大事だと思っているのは、ディベート、プレゼンテーションです。これを重ねることが、創造につながるからです。今までの学校教育では、自分が新しく見つけ出したことを、人にわかるように説明し、理解させ、そこから新たな考えを生み出すと



#### ▲はやぶさ(MUSES-C)

小惑星のサンプルリターン探査のための技術実証を目的に開発。2003年打ち上げ。2005年、小惑星「イトカワ」着陸に成功。その後、エンジン停止や通信途絶などの多くのトラブルを克服。2010年、約60億キロの旅を終え、7年ぶりに地球へ帰還した。帰還カプセルからは、イトカワの微粒子が発見され、分析が進んでいる。(提供: JAXA)

いった訓練が少なかったのではないのでしょうか。学校の教育は、基本的に、教育を受ける側が、材料が提供されるのを待っているわけですが、自分から材料を取りに行く機会も必要でしょう。新しいことに気づく能力は、本来だれもがもっているはず

です。それをどう引き出していくかが大切になるでしょうね。

「学ぶ」ことは、受け身です。それにとどまらず、どこにも書いていないことを探し出してきて、それを発表する訓練をする。それをプラスの要素として評価していく部分が学校教育の中にもあれば、今後の社会のあり方もずいぶん変化するのではないかと思えます。

### 「はやぶさ」は、ハイリスク・ハイリターンなプロジェクトであったと聞きます。

「はやぶさ」は、さまざまな技術実証を目的に開発されましたが、何も小惑星まで往復飛行させなくても、技術実証だけならできるのではないかという見方もありました。でも、だれもやったことのない、思いついていないことをやらないと、技術の要素だけ実証できても、再び大きなプロジェクトにつなげることはできないでしょう。

日本人は、不十分なものに手を出さなければ、これはよい判断だったと安心する傾向があります。その考え方が、これまでの日本の製造業の品質を支えてきた面があります。しかし、それを「はやぶさ」プロジェクトに当てはめると、全くのアウトになります。前人未踏のことをやるのですから、すべてのことが不安だし、不完全なものです。でも、「このプロジェクトをやらなくてよかった」で、だれが納得するのか。何の進歩もないことになります。新しい世界を切り拓こうとするならば、プラスがあったらやる、と思わなければ

ばいけない。

100の事案があったら、99はリスクを十分考えながらやる。しかし、1個はリスクが大きくてもやってみる。それこそが、進歩を生み、次世代の創造につながると思っています。

### 2014年には、「はやぶさ」の後継機となる「はやぶさ2」が打ち上げられる計画ですね。

「はやぶさ2」プロジェクトでは、私をはじめ、「はやぶさ」プロジェクトの中心メンバーは、技術と経験が継承できるよう、次世代のメンバーへの助言・アドバイスを回ります。

私は、アドバイスというのは、すなわち共同作業だと思っています。考え方や方向性についてディスカッションする。一緒に取り組む場を設けるといふことです。単に書き物に残して、これを読めとか、こういうふうにするべきだと言うだけというのでは、助言とはいえません。共同作業を通して、どういうふうにかえてプロジェクトを始め、どういう道を選択していったかが復習される。その中で新しい技術・発想を生み出せていくと考えています。

日本には今、閉塞感が漂っていると言われますが、どんな時代でも、「我々の時代には何も残されていない」と思う人はいたのではないのでしょうか。例えば、ダ・ビンチの時代でもそうでしょうか。そこで何かが新たに出るか出ないかは、可能性を追求しているかどうかです。

アドバイスを求められて、問題点を指摘するだけでは、「やらなくて済む」「できない」理由を与えることになってしまいます。問題点を乗り越える解決策と一緒に模索し、新しい挑戦を評価していくべきです。

「はやぶさ」でも、さまざまな困難がありました。これは「これはできない」ではなく「こうすればできる」という方向で皆が考えたからこそ、アイデアが次々に出てきたのです。リスクを恐れるばかりで、不十分だと思われることはやらなくていい、という文化では、進歩はないでしょう。

子どもに向き合う先生たちにも、子どもたちのインスピレーションを大切に、伸ばすこと、「できる理由」を探すことを大切にしてほしいと願っています。着想を評価すること、それが自信となり、挑戦につながるのです。

## 中・高・社会の接続

# 生徒の「夢の扉」を開く キャリア教育



東京都荒川区立第三中学校  
主幹教諭  
佐瀬 順一

### 進学指導からキャリア教育へ

中学校の進路指導と言えば、3年生に行う上級学校への進学指導をイメージする方が多いのではないだろうか。本校でも、3年生保護者生徒を対象にした年2回の進路説明会や、高校の先生を講師に招いた高校進学講座を行い、一人一人の生徒が、主体的に進路選択をできるように努めている。

同時に、本校では、学校を卒業した後、一社会人として「働く」ことの意義を考えるための「キャリア教育」にも力を注いでいる。本校では、「キャリア教育」とは単なる「職

業教育」ではなく、自らの生き方を考え、将来に対する目的意識をもち、自己実現を図る能力や態度を育成する「生き方教育」と位置づけて、3年間を通して段階的に実施している。

### 荒川三中のキャリア教育

1年生では、生活班ごとに都内の職場を訪問しインタビューを行う「職場訪問」。2年生では、区内を中心とした事業所で5日間の勤労体験を行う「勤労留学」。3年生では、2年時の勤労留学の体験を、これから体験する2年生に事前学習として伝える「勤労留学報告会」を行っている。そして、毎年10月には、全校生徒を対象に、様々な仕事に携わる大人から直接話を聞く「校内ハローワーク」を実施している。

### 「校内ハローワーク」の実践

平成14年4月、本校は地域の再開発に伴い、現在の教科教室型の校舎へ移転した。当時は各学年1〜2クラスの小規模校だった。そこで、教科教室の有効活用を考えると、当時の校長の発案で「校内ハ



ローワーク」がスタートした。開始当初は20職種程度の方々を招いて実施したと聞いている。生徒数は年を追って増え、現在は全校10クラスで実施している。

10回目を迎えた今年度の「校内ハローワーク」は、10月8日(土)に31職種、44名の講師を招いて実施された。

### 講師の職業一覧

ツアーコンダクター、アナウンサー、美容師、アニメーター、社会福祉士、警察官、自衛隊員、芸能マネージャー、消防士、建築士、TVプロデューサー、声優、ガードマン、デパート店員、保育士、パソコン開発者、パティシエ、プロ野球関係者、トリマー、漫画家、銀行員、ネイルアーティスト、鉄道運転士、書籍編集者、犬の訓練士、航海士、看護師、役者、キャビンアテンダント、エディター、新聞記者

講師の選定で留意していることは、普段接することのない職業に就いている方を呼ぶこと。生徒にとってあこがれの職業に携わる方の話は、働くことへの興味や関心を高めると考える。

開講式で全講師が紹介された後、生徒は、あらかじめ希望アンケートによって分けられた30分の講座を3つ受講する。したがって、3年間で9講座を受講できることになる。各講座では、仕事で使う機材等を用いた実演を

していただいたり、電子黒板を使って仕事の様子の写真を見せていただいたり、説明を受ける。その後、質疑応答となる。各講座は1〜3年生の縦割りグループで構成される。3年生がリーダーとなって、各グループをまとめる。

#### 生徒の感想

校内ハローワークを通して、「お金をかせぐために仕事をする」というイメージは「その仕事が楽しいから仕事をする」に変わった。仕事は楽しいことばかりではない。悩んだことだってたくさんあると思う。でも、その仕事が好きだから続けているのだと思う。その証拠に仕事の話をしている講師の先生は全員笑顔だった。(1年生女子)

#### 職業人から生徒へ伝えたい思い

校内ハローワークで特筆すべきは、生徒の変容だけではない。講師の方々へのアンケートには「真剣に話を聞く中学生の姿に感動しました。来年も校内ハローワークを実施する際には、ぜひ、声をかけてください。」という記述が多く見られる。古来、仕事は父から子へ、師匠から弟子へと連綿と伝承されてきた。伝えたいという講師の思い、知りたいという生徒の思い。二つの思いが重なって、校内ハローワークは、これからも荒川三中キャリア教育の中心的な活動を担っていくことになるだろう。

#### 「宇宙への夢」がつなぐ中高連携活動

平成21年1月23日12時54分、種子島宇宙センターからH2Aロケットが打ち上げられた。そのロケットには、東京都立産業技術高等専門学校（以下高専）の学生が製作した人工衛星「輝汐<sup>きせき</sup>」が搭載されていた。

昨年度、荒川区道徳郷土資料集に「輝汐」打ち上げまでの物語を掲載することになった。担当として道徳資料を作成するため、「輝汐」打ち上げのために学生を指導した、石川准教授を訪ねた。その後、様々な縁が重なって、「輝汐」のエピソードは「輝汐」が起きた奇跡」として、平成24年度版、中学道徳1「心つないで」（教育出版）に収録されることとなった。人工衛星は作れても、1000万円かかる打ち上げは難しいかもしれない。けれども、自分たちで人工衛星を作って打ち上げるといふ夢の実現に向けて努力する学生たち。そこに、H2Aロケットに無料であいのりという話が飛び込んでくる。搭載審査C判定という試練は、町工場

の協力で乗り越え、夢は現実になる。

平成23年10月22日（土）、道徳授業地区公開講座で、本校1年生に、人工衛星「輝汐」の授業を行った。終末の「夢を実現するために必要なことは何か？」という問いに、生徒



たちは「信じる心」「努力」「協力」「学力」「技術」「失敗」「忍耐力」と答えた。

現在、荒川三中パソコン部の有志の生徒が、毎週末、高専の宇宙科学研究同好会に参加している。目的は「輝汐」2号の製作。高専の学生や石川先生に指導していただきながら、現在は半田付けの技術を磨いている。新たな中高連携活動である。これも「輝汐」が起きた「奇跡」の一つかもしれない。

人は「夢」をもつと困難に打ち勝つエネルギーが生まれる。すると、努力を苦とは感じなくなる。進むべき進路も自ずと見えてくる。そして、夢の実現に向け努力する人の周りには人が集まる。学校が生徒の夢を育み、実現のための協力を体感できるような場になるよう、人とのつながり、絆を大切に、キャリア教育をこれからも推進していきたい。☪

## 国語はコミュニケーションも 学ぶ科目



新潟県 高校教諭(国語科)  
片桐 史裕

### 自ら文章を読めない子供たち

現在勤めている学校は、新潟市内の学校でも、子どもたちの学習意欲は平均的にかなり高い学校である。ところが、4月から1年生を中心に受け持っているが、自ら文章を読み取ろうという姿勢があまり感じられない生徒が多いのだ。入試の成績は、割と高い点数で入ってきた生徒だ。しかし実態としては、教師の話は静かに聞く態度はあるのだが、わからない言葉を自ら気づいて調べようとしなかったり、どこが読み取れないのか、自分で

探ったりする姿勢があまりない。いったい生徒たちは中学時代に国語をどのように学習してきたのだろうか、という疑問を持った。

### 教師の話聞いて暗記だけの国語

受け持っている生徒全員に、5月の中間テスト後にアンケートをとった。「中学と高校の授業で違うところは何でしたか?」「国語の授業で学んだこと」というものだ。そこで目立ったのが、「高校では予習をしなければならぬ。」「中学の時は先生が全部解説をしていただけ、高校は自分で考えないといけない。」「というものだ。

正直驚いた。以前私が勤務していた実業高校での授業も、今の学校と同じように、文章について自分たちで考えて読み進めるものだった。その時も、最初はなかなか自分から授業に取り組めない生徒が多かった。私は、心の中で、「それほど学習意欲が高くない生徒は、自分で考えたり、わからなかったら話し合いを行ったりするというのは、難しいのだろうか?」と思っていた。しかし、目の前の生徒たちの実態を見るとどうやらそういうことではなく、中学校では、自分で文章を読み取っていく力を養う授業を受けていないのだとわかった。

私がよく参加している研究会では、小学校の先生が多い。よく聞くのは、小学校では、国語の授業以外でも話し合い活動や、自分た

ちで疑問を探っていく活動をしなないと授業をやっていけないということだ。集中力が以前よりも続かない子が多くなったということもあるが、子ども同士のつながりが希薄になり、いったん家に帰ると習い事ばかりで、近所の友達と遊ぶという機会がないそうだ。だから仲間とのコミュニケーションがうまくとれずトラブルが多い。よって、学校の活動で、うまくコミュニケーションをとれるように仕組んでいく必要がある、と小学校の先生方は言っていた。

小学校でコミュニケーションの力を育む授業を行っているのだから、きっと中学でも引き続き、話し合い活動や、自ら考えていく授業をしているんだと思っていたら、全くそんなことはなかった。小学校で培った力を中学で断絶させてしまったら、いったい子どもたちは、どこで社会に出て必要な力を身につけていくのだろうか?

### 本当に必要な国語の力とは?

中学校の国語授業が高校受験対策ばかりで言語活動をほとんど取り入れない、コミュニケーションの機会が全くないものになっているという現実があるのは理解できる。実際、高校現場でも、言語活動を取り入れた授業は、模擬試験の偏差値を上げるうえで不要だと平然と言う教師もいる。しかし現実問題として、コミュニケーションが上手にとれないた

▼生徒へのアンケートの回答



め、クラスに居場所を見つけれず、不登校になり退学していく生徒は多い。

例えば、我々に置き換えてみると、仕事のうえでコミュニケーションを禁止された場合、仕事以外の場面で同僚とコミュニケーションをうまくとることができないはずがない。子どもたちは、学校生活の大半である授業中にコミュニケーションをとる機会がないのに、授業以外でコミュニケーションをとることができるはずがない。新学習指導要領では、各教科における言語活動の充実が明記されており、国語という教科でそれを無視することはできない。地域の子も同士でコミュニ

ニケーションを勝手に学んでいた時代は、もう過ぎ去ってしまった。今、それを学ぶ機会は学校でしかなくなりつつある。小学校で培っているコミュニケーションの能力を、なんとしても中学で断絶させてほしくない。「高校入試対策」としての知識注入授業をして高くないかなければ元も子もないはずだ。

**テキストとの「コミュニケーション」**

国語という教科は、文章に向き合う教科でもある。文章に向き合うことで読みを深め、理解する。しかし、授業で教師の解釈を押し

つけることは、文章に向き合うことを阻害し、教師の解釈に向き合うことを強いている。これでは、いつまでたっても自分で文章を解釈することはできない。テキストと対話(コミュニケーション)し、独自の考えを持つことはできない。

授業をしていると、生徒たちは、問いに対する答えをすぐに求めようとする。自分たちでじっくり考えようとはせず、教師の解釈をすぐに求める。教師の解釈をノートに写すことにやっきになり、それらが示されると思考停止に陥る。これではテキストに向き合っていることにはならない。テキストとのコミュニケーションはできない。

国語で学ぶことは、大きく分けて二つある。一つ目は説明文を学ぶときに「書かれてあることを正確に読み取ること。」二つ目は文学作品を学ぶときに「書かれていないことも読み取ること。」三つ目は、目の前の仲間や自己と「対話」をすること(コミュニケーション)である。すべてテキストとの対話を元に行うことである。新学習指導要領で求められている言語活動とは、これらの三つを充実することである。そしてこれらは小学校から高校まで、繰り返し行われなければならない。子供を立派な大人にするために、中学でも、ぜひともコミュニケーション能力を育む授業を継続して行ってほしい。

当初は、一教員という立場で実習に臨んでいたのだが、そうすることにより、自分にとって必要なこと、不必要なことというように、自分の中で勝手に解釈をしていることがわかった。そこで、途中から、全体を見渡すことにより、学校におけるあらゆる職務が自分自身にとって必要であり、取り組まなくてはならないことであると気づいた。その結果として、学校全体に気を配り行動していく必要性を認識させられた。

### ○若手教員育成と同僚性の構築(課題研究科目)

「若手教員の授業力向上を目的とした教師の連携・相互理解のあり方について」という研究テーマを設定し、中学校における若手教員育成のための方策として、学年内の教師間連携・相互理解のあり方を示し、それを推進していくためのプログラムの開発と、効果的な活用法を提案することとした。

そして、アンケート調査、インタビュー調査等をもとに課題を分析し、「授業相互観察・書き込み回覧方式協議会」のシステムを開発した。導入前後のアンケートを比較しても、多くの項目で授業力の急速な向上が見られた。このシステムを導入することにより、若手教員の授業力向上、教師の連携・相互理解、時間の確保の3つの課題を一気にクリアすることができ、1つの学年内の同僚性を高めることに成功した。

▶授業相互観察シート記入例

授業相互観察シート		観察者	被観察者		
1	授業開始から、学習の準備ができていない場面	4	3	2	1
2	授業開始から、学習の準備ができていない場面	4	3	2	1
3	授業開始から、学習の準備ができていない場面	4	3	2	1
4	授業開始から、学習の準備ができていない場面	4	3	2	1
5	授業開始から、学習の準備ができていない場面	4	3	2	1
6	授業開始から、学習の準備ができていない場面	4	3	2	1
7	授業開始から、学習の準備ができていない場面	4	3	2	1
8	授業開始から、学習の準備ができていない場面	4	3	2	1
9	授業開始から、学習の準備ができていない場面	4	3	2	1
10	授業開始から、学習の準備ができていない場面	4	3	2	1
11	授業開始から、学習の準備ができていない場面	4	3	2	1

観察項目	観察内容	評価
授業開始	授業開始から、学習の準備ができていない場面	4
授業進行	授業開始から、学習の準備ができていない場面	3
授業終了	授業開始から、学習の準備ができていない場面	2

### ●学校現場に戻って

1年間の教職大学院派遣研修を終え、今年度は所属校に戻り、これまでどおり勤務している。一番の変化は、自分自身の心のゆとり、キャパシティが増え、すべてのことに余裕を持って対応できるようになってきたことだ。時間のない日々の職務の中で、冷静に、今後のビジョンを持って行動できるようになった。そして、視野が広くなり、まわりの先生方の様子を客観的に見られるようになったことで、一人一人の先生方の長所や抱えている課題を、的確に把握できるようになってきた。このことに関しては私自身も驚いている。

研究成果の活用については、研究授業後の協議会において、前述の「書き込み回覧方式の協議会システム」を取り入れることで、短時間で



▲研究成果報告会

で教師間の相互理解を深め、効果を上げている。また、若手教員育成の面においても、昨年度の実践研究に改良を加えて実施することで、生徒との関わりを持つ力と教科の専門性の双方を育成することが可能になった。

そして、教職大学院での研究成果、今年度の現場で実践している取り組みを、各種研究会やセミナー、学会等で報告する機会を数多くいただいている。また、若手教員対象の研修会やこれから教職に就く学生に対してもお話をする機会をいただいている。「授業力向上」と「同僚性の構築」は重要な課題としてとらえられており、多くの学校現場で求められていると感じている。今後も研究に改良を重ね、伝えていければと思う。

最後に、この度の教職大学院派遣研修は、これまでの教師生活や自分の身のまわりに溢れている教育課題を客観的に見つめ直す、またとない機会になった。多くの大学の先生方、大学院の仲間、そして、現場の先生方のサポートがあって成功したものであり、感謝している。この素晴らしい経験をこれからも還元し、広めていきたい。

# きょういく 見聞録

## 協働する力

東京学芸大学教職大学院での  
学びを通して

私は、昨年度1年間、東京都教育委員会の教職大学院派遣研修の一環として、東京学芸大学教職大学院において研修を行ってきた。教職大学院では、全国から集まった校種の異なる現職教員学生と、学部卒のストレートマスターが、同じ大学院生として「協働」しながら、現代教育が抱える多様な課題への対応策を模索していった。

実際にどのような学びをし、今年度、現場に戻りどのようなことを実践しているのかを紹介していきたい。

東京都八王子市立第一中学校 主任教諭 上野 和広

### ● 若手からミドルへの意識改革

私が教職大学院への進学を考えたきっかけは、今から3年前に10年経験者研修を受講したことである。それまで勤務していた3つの中学校では、後輩がほとんどおらず、中堅教員としての実感はなかった。しかし、研修を受ける中で、今後、ベテラン教員の大量退職、若手教員の大量採用が現実としてひかえており、私たちの世代が中堅教員としての自覚を持ち、教員の実践的知識や指導技術の維持、若手教員の育成を担っていくためにも、自分自身の立場を再認識し、意識を改革していかなければならないと痛感した。

そして、翌年、東京都教育委員会から大学院派遣の募集要項が届いた。そこには、教科の専門性を高める既設の大学院派遣研修と、複雑化・多様化する教育課題に対応する高度な応用力・実践力を育成する教職大学院派遣研修の2つがあった。



▲大学院授業風景

私は、現代的な教育課題に対する資質・能力を高めるために、教職大学院派遣研修を選択した。

### ● 教職大学院での学び

東京学芸大学教職大学院では、現代的な教育課題に対する学校全体の取り組みにおいて中心的な役割を果たし、教職員・保護者・地域の人々・専門家と協働して問題解決にあたる、スクールリーダーを養成することを目的としている。ほぼすべての授業において、フィールドワーク、ワークショップ、ロールプレイング等の教育方法を取り入れ、現職教員学生とストレートマスターがメンターとメンティーの関係を構築しながら進めていき、それぞれの専門性を持った大学教員が支えていくという協働システムがある。また、大学院で学んだ理論を連携協力校等の外部機関での実践と結びつける協働システムもある。こちらについては、多くの方々との出会いがあり、ネットワークを構築し、広げていくこともできる。

以下に、私が実践した実習科目と課題研究科目について、もう少し示していく。

#### ○現場での学び(実習科目)

大学院派遣中は、週に1回程度、年間35回の実務実習を所属校で行った。この実習では、教科の授業や学級担任、校務分掌を担当せず、これまでとは異なる一歩引いた立場から学校運営に関わることができた。その結果として、学校全体を見渡す力が身に付き、自身の意識に変容が見られたように感じる。

## 広島県 広島市教育委員会

# 思考力・判断力・表現力を育てる ひろしま型カリキュラム 「言語・数理運用科」

平成22年度、広島市では、「小中学校の連携・接続」,「小学校英語科」,そして「言語・数理運用科」を柱とした「ひろしま型カリキュラム」がすべての市立学校で始まりました。

新教科「言語・数理運用科」は、各教科で得た知識の、実生活での活用力を育むことをねらいとして開発。小学5年から中学3年で行われます。「かき養殖」や「路面電車」,「お好み焼き」など、広島ならではの身近な素材をモチーフにした教科書を用いて、子どもたちは、学習が日常生活に生きることを実感しています。



「少数意見が多数意見にのみまれないよう、多様な意見を聞く機会をつくることに気をつけて授業を組み立てるようにしている」と口田東小の齋藤先生。「自分と違う意見のおもしろさに子どもたちが気づくことで、自身の意見にも説得力を持たせたいと、表現する力がさらに育てば」。

### 根拠を明らかにして述べる

「広島のかきがおいしいことをみんなに広めたいから、どんな人が応募したのか知りたいのだと思う」「かきを無料で届けるだけなら、家族の名前まで書かせるのはおかしい」……。口田東小学校の5年3組で、子どもたちの意見が飛び交っています。この日の言語・数理運用科の授業は、「インターネットで検索したら」「秘密のかき産地」というwebページのアンケートに答えるかどうか。アンケートを送信する、しない、それぞれの根拠をしっかりと述べ、友達のを聞いて、自分の考えと比較します。

さらに、担任の齋藤美香先生からは、「では、このwebページをつくった人は、なぜこんな項目について聞こうと思ったのかな」と問いかけがなされました。子どもたちは、下を向いてじっと考えたり、思いついたことを余白にどんどんメモしたり。それをもとに、ワークシートに自分の意見と、なぜそう考えたか、理由を書きつけていきます。

### 真の授業力が問われる

思考力や表現力の育成は、以前から学習指導要領等でも重要視されてきましたが、広島市においても、知識注入型の一斉授業という形が多いのが実情でした。

指導主事の阪田淳二先生は話します。「そもそも、思考力・判断力・表現力を育てる授業がどんなものか、各教科でどんな思考力が必要なのか、先生方も十分に把握できていな

1 「言語・数理運用科」導入で、先生たちは「待つ」ことができるようになったという。活発に発表するだけが良い授業ではなく、皆がだまって資料を読み取ったり、考えたりしている、沈黙の時間の大切さを実感。その時間は、子どもたちが何を考えているか見取り、困っている子を見つけて支援し、誰が何を考えているか把握して次の展開につなげる、先生もじっくり考える時間だ。

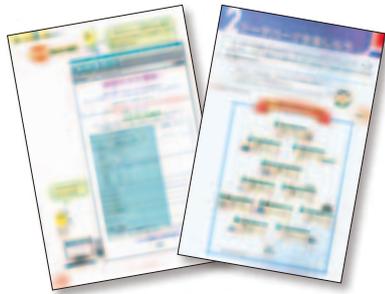


2 ワークシートを丁寧に見取ることで、たった一行にその子なりの考えが凝縮されていることにも気づく。その一行に花丸をつけることで、子どものやる気も増す。「一人一人の思考をしっかりと見ていくと、子どもが伸びていくという手ごたえを実感します。」



3 「言語・数理運用科」は、教科として評価規準を示し、評定まで行う。テストがないため、授業での様子やワークシートに書いていることを丁寧に見取る必要がある。この辺りの先生の意識も変わってきており、他の教科でも、テストだけに頼らない評価に生きているという。

4 「なぜこのようなサイトをつくったのか」「個人情報を入力してどんなことをしようと思っているのか」「信用させるためにどんな工夫がされているのか」など、webページの作り手側の立場からも考えて、意見を交換する。これまでの経験やニュースで知ったことなどと関連つけて、「個人情報流出すると危ない」という概念にとどまらず、考察を深めている。



5 五日市南中学校での公開授業研究会。「言語・数理運用科」の行われた教室は、多くの見学者で埋まった。小学校の先生も多数来場。小5～中3で行う「言語・数理運用科」では、小学校と中学校の先生が同じ土俵で話ができる。小中の先生の間で、教科の内容論にとどまらない「授業論」ができるようになった。

6 中3の「テーマパークを楽しもう」では、アトラクションの地図や人気度を考えて、効率よく楽しむにはどうしたらよいか、グループで行動計画表をつくり、なぜ効率的なのか説明する。中学校では、担当教科にかかわらず、学年単位で単元ごとのチームを組む。この日の授業は、体育の藤本祐二先生。

参考図書

言語活動実践ガイド

― 思考力・判断力・表現力を高める「ひろしま型カリキュラム」―

編著・広島市教育委員会 発行・きょうせい

言語・数理運用科が全面实施されて今年度は2年目。「今後、実践を積んだ子どもたちが進級するに連れ、子どもたちの情報編集・発信能力がぐっと向上するのは間違いないでしょう。先生たちが、それをどう深化させるかが問われます。研修や研究授業をさらに進めたい」と、橋本先生。広島市の先生方の、授業力向上への意欲は、さらに高まっています。

子どもたちの能力向上に負けない

言語・数理運用科が全面实施されて今年度は2年目。「今後、実践を積んだ子どもたちが進級するに連れ、子どもたちの情報編集・発信能力がぐっと向上するのは間違いないでしょう。先生たちが、それをどう深化させるかが問われます。研修や研究授業をさらに進めたい」と、橋本先生。広島市の先生方の、授業力向上への意欲は、さらに高まっています。

「子どもたちの能力向上に負けない」という反省がありました。ですから、各教科の思考力とはどんなものなのかを整理し、それらを網羅した教科をつくったのです。言語・数理運用科の授業経験を、各教科の授業の改善につなげる。これが、最も大きなねらいと言えます」。

言語・数理運用科は、比較、関連づけして考え、根拠のある意見を出すことを経験させる授業なので、先生が答えを教えることはできません。「表現された意見をどうつないでいくのか。方向がそれたときに、どう元に戻していくのか。先生たちにとって、真の授業力が問われる時間なんです。」と、主任指導主事の橋本裕治先生。「先生方が、子どもがどんな思考をしているのかを丁寧に見取っていく過程で、こんな理由でこういう考え方が出てくるのか、という発見も多いようです。」子どもたちが自由な発想で議論ができることにも、先生方は改めて気づいているといいます。



## 「もし自分だったら」と考えられる子ども ～NIE(教育に新聞を)を通して～

板倉町立北小学校校長 石田 成人

群馬県

**北** 小学校は、NIE 実践指定校として、3年目の実践を継続している。教科書や副読本と併用して、新聞の記事や投稿を活用している。社会で起こる事象や話題等、新聞ならではのよさを生かし、授業改善に役立っている。

活字離れが進む中、本校の保護者の新聞購読率は高い水準にある。また、NIEの推進により、複数の新聞の購読を始める家庭も増えている。はじめから新聞の細かな活字を読むことは、子どもにとって難しい。学年に応じて、写真やイラストから徐々に文字に親しむ、段階を追った指導に努めている。また、新聞スクラップを取り入れ、興味や関心のある記事を切り抜き、感想を書き加えている。各学年の廊下では、



思い思いの収録が分厚く綴られ、子どもたちどうしてそれを読み合っている。家庭で新聞を読む子どもは、増えている。保護者はその姿を

見てほほえんでいる。

道徳の授業では、新聞の記事や投稿を活用している。それらは、素材である。教材として息を吹き込むのは先生方である。先生方は、自発的に教材研究をできる楽しさを享受している。一方、子どもたちは、問口の広さや奥行きに戸惑う中、心に汗をかくほど考える。答えが出ない。先生を喜ばず模範解答もままならない。やがて、子どもたちは、本当の自分の考えを話し始める。語られたことをもとに教師は子どもに返す。応答する子どもの言葉を、周囲の子どもはしっかりと聞いている。本当の自分の気持ちを多くの参観者の前で話すことや、交流できる子どもが育っている。



自らの考えを持ち、言葉により表現することは、真の民主国家の成員としての必要な条件である。子どもにとって「もし自分だったら」と考えることができることは、その第一歩となる。NIEはその大きな力となる。

## 知的好奇心と探究心を育てる理科学習へ

八千代町立川西小学校校長 岡田 美智子

茨城県

**川** 西小学校は、東に紫峰筑波山を望み、鬼怒川とともにある、児童数164名の小規模校です。子ども一人一人のよさや可能性を発見し、伸長させることで自分に自信を持たせたいと考えています。そして、よりよい人間関係を築きながら、何事にも意欲的に粘り強く取り組む児童を育てています。

理科離れが指摘されている昨今ですが、本校の児童は理科が大好きです。実験や動植物の観察が楽しいことをその理由に挙げています。

今年度、「いばらきサイエンスキッズ育成プラン」による小学校理科教育推進事業の指定を受け、モデル小学校として研究を始めました。本校で特に力を入れているのは、学習の導入と終末です。これまで、児童は実験や観察に楽しく取り組むものの、結果から予想や仮説を検証し推論するという活動が不十分でした。

そこで、まとめの時間に十分時間を確保するようにし、実験結果から何が言えるのかを自分で考察し、表現する活動を充実させています。その結果、新たな疑問や実験・観察の必要性が明らかになり、次時の課題

も明確になってきました。自分なりの予想を立てて授業は終了します。指導者は、ノートに記された予想や仮説から次時の学習展開を効率的に行うことができるようになりました。また、課題を楽しく明確なものにすることで、予想は身の回りにある現象やこれまでの体験をもとに自分で考えることを重視しています。

夏休み、142人の児童が一人一研究に取り組みました。身の回りにある疑問を解決しようと、自分で実験や観察の仕方を考え、自分なりの予想を立て、そして、実験や観察の結果を記録し、表やグラフにまとめるという一連の活動を、各自がしっかりと行いました。その成果は、理科室に大切に展示してあります。

未来の科学者たちは、今日も元気に、カエルやトカゲと、そして友達とたわむれています。





## 法教育を広めるためのFAX教材づくり進行中！

神奈川県

横浜弁護士会所属 弁護士 村松 剛

**法**教育の教材づくりに、私たちは、今年度1年かけて取り組んできました。基本コンセプトは、「誰でも簡単に取り組める」「1時間でできる」「コピーしてそのまま使えるワークシート」です。

参加しているのは、神奈川県内の中学教師8名（OB1名）、弁護士9名で、「法を生活のツールとして」活用し、より成熟した社会づくりへ参画する人を育成したいという「思い」を共有しています。「対立と合意」、「効率と公正」、「契約の重要性」、「きまりの意義」などの、公民的分野で取り組むことになる内容について、具体的な事例をもとにした教材を開発することと、法教育をより多くの教師に広めるというのが、私たちのねらいです。

そこで、次のような工夫をしました。

- ①身近な題材を扱いながら、社会科の年間指導計画に位置づける。
- ②弁護士による法的な視点からのアドバイスを示す。
- ③教師からの授業を進めるうえでのポイント解説を行う。

これなら、多くの先生方に使ってもらえると確信しています。

また、新たな取り組みとして、社会科の教科構造から、地理・歴史での学習の上に立つことが大事であると考え、地理的分野、歴史的分野でも、「法教育的な」授業づくりを提案しています。「学級連絡網」、「無料ゲームサイト」、「学級会」、「監視カメラ」などの具体的な題材を、教科書の配列に合わせて教材化しています。歴史では、「生類憐れみの令」や「自由民権運動」なども取り上げてみたいと思っています。

教員と弁護士という、普段のフィールドが異なるメンバーたちが、熱い議論を交わしながら、新しいタイプの教材を作成しています。

当たり前のことを当たり前でできる  
生徒・教師をめざして

愛知県

あま市立じもくじ甚目寺南中学校校長 松永 裕和

**甚**目寺南中学校は、校訓「真（真理を求め続ける生徒・教師）・善（礼儀正しい生徒・教師）・美（感性豊かな生徒・教師）」のもと、当たり前のことを当たり前でできる学校づくりに努力をしています。そのために「師弟同行の精神・モラル向上・協働・小中連携・地域活動への参加」をキーワードとしています。

師弟同行の実践では、学校祭の合唱コンクールに向けて、合唱の専門家から生徒・教師ともに学ぶ機会を設けました。生徒は気持ちのつくり方や発声法、呼吸法についての指導を受け、教師は生徒への言葉がけの方法をはじめ合唱の指導法について助言を受け、よりよい合唱づくりに努めました。学校祭での3年生の合唱は見る者を感動させました。



小中連携の実践では、中1ギャップの解消・小中間の指導方針の共通理解を目標に、学区の小学校（2校）との小中交

流会を3年前から実施しています。教師間の交流会では、「共通した授業の約束」づくりについての話し合いや中学校に進学した生徒についての情報交換等を行いました。児童生徒の交流会では、小学校6年生の中学校部活動見学体験会を年2回実施しています。1回目は複数の部活動を見学し、2回目は1つの部活動に参加し中学生とともに活動します。これにより入学後の部活動への入部がスムーズに行われています。

地域活動への参加の実践では、「マイタウンゴミゼロ運動」としてPTAの協力の下、地域清掃に取り組んでいます。自分の住む地域の環境への関心を高め、地域住民とのふれあいの機会としています。さらに地域で行われる諸行事を生徒に紹介し、積極的な参加を呼びかけています。

教師と生徒がともに学び合い、家庭や地域、関係機関との連携協力を一層密にして、地域から愛され信頼される学校づくりに奮闘中です。



# ★地球となかよしメッセージ★



## 入賞作品発表

◎協賛／日本環境教育学会 ◎後援／環境省、日本環境協会、全国小中学校環境教育研究会、毎日新聞社、毎日小学生新聞

第9回「地球となかよしメッセージ」。全国、そして世界から、多くのすてきな作品が寄せられました。  
応募総数 1000 点以上の中から、特別賞 6 点、学校賞 2 校、入選作 18 点が選ばれました！

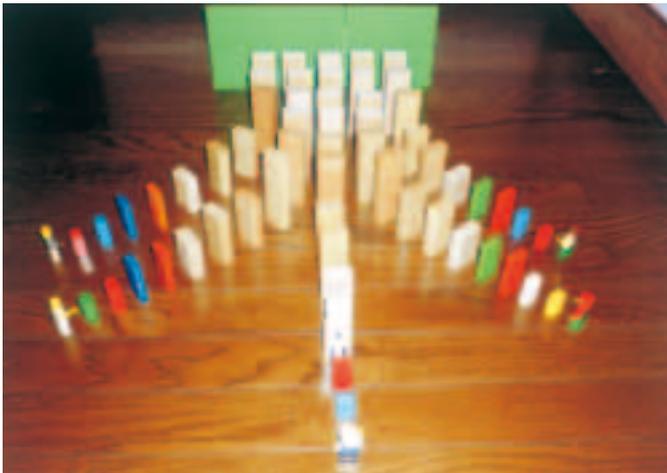


集まれ、力！

水野 友瑛

神奈川県 相模原市立鶴野森中学校 2 年

環境大臣賞



写真では、ブロックの人形 5 体が小さなブロックを最初に、どんどん大きなブロック、つみきになり、4 列あわさり、ついには大きな壁を倒そうとしている。一人一人は小さな力だが、だんだん集まり、ついには大きな物事を動かす。一人の力が欠けたら、けて大きな物事は動かない。

地球環境を変えることも全く同じだ。全ての人が、「地球環境を変えよう」という思いのもと、小さな力だとしても行動をおこさないと、けて環境は変わらないのだ。

今は、地球環境を変えるために、いろいろな対策が施されているが、少し立ち止まって、よく考えてほしい。いろいろな対策を考えるより、みんなが地球環境を変えようという思いを抱き、対策を考え、そしてみんなが環境問題を身近に感じ、「このままではまずい」と思わなければならないと思う。

評 地球環境という大問題も、一人一人の意識が一点に集中すれば、必ずや突破できると、力強く訴えかけてきます。

小さなことから始めよう

三浦 大輝

東京都 東京学芸大学附属小金井小学校 4 年

地球となかよし  
大賞



ぼくは卵のからを使った作品を作ろうと思い、毎日食べる卵のからをとっておいて、色をぬり、小さくつぶしました。卵のからはとてもこわれやすく、小さな物だけど、たくさん集まれば丈夫な物になりました。

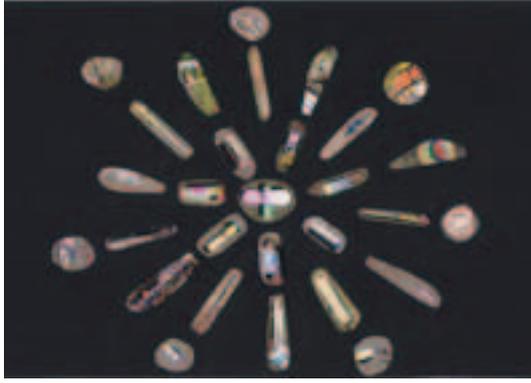
今、地球上では開発のために自然をこわしたり、安全でない方法で電気を作ったりしているので、ぼくたちが大人になった時には地球はきたなくなっているのではないかと心配です。みんなが環境を守るために、もっとよく考えるべきだと思います。ぼくは節電して 8 月は去年より 21% 電力使用量がへりました。みんなの小さな取り組みが地球をよりよい場所に変えていくのではないかとぼくは思います。

評 小さな小さな卵のからがひびき合えば、こんなに目が輝き澄んだ、美しい世界がつくり出されるのですね。

## 真昼の花火

松口 果歩・松口 莉歩

大阪府 エコクラブ ほぼぽくらぶ 中学1年



河原に花火が落ちていた  
川の中にも落ちていた  
燃えながら、燃えさしあちこちに  
夜空を彩る打上花火  
楽しい思い出線香花火  
川の魚も見てたかな

真昼の花火も見に来てよ  
水辺を悲しく汚してる  
すすけた花火が待ってるよ  
川の魚も見ているよ

【評】昨夜の花火の燃えさしでかたどった真昼の花火。美しいものは最後まで美しくと、有終の美を飾っています。

全国小中学校  
環境教育  
研究会賞

## 東日本大震災

福島 大喜

香港日本人学校小学部香港校6年



日本加油  
香港のあちこちで見る言葉  
ヤップンガーヤウと読むそうだ

日本加油  
店に行くときそう書かれた箱がある  
お金がたくさん入っていた

日本加油  
それは日本がんばれという意味だ  
大丈夫？知らない人がぼくに聞く  
ぼくが日本人だから

なぜだろ  
心がポツとあったまる  
香港のみんなありがとう

ぼくに何ができるか分からないけど  
香港から祈っています  
日本加油

【評】激励、愛、祈り、笑顔、元気、支援などなど。画面いっぱいにあふれ出しています。「元気」をありがとう。

日本環境  
教育学会賞

## いのちをたいせつに

辻 彩音

兵庫県 尼崎市立七松小学校2年



わたしは、おかあさんおとうさんと、かぞくがじぶんのいのちをくれたからそのいのちをたいせつにということをごめてこのポスターを作りました。

せかいじゅうのみんなが、じぶんの、いのちを、たいせつにしてほしいからです。だいたいとか、考えた中からえらんだり、したことがむずかしかったです。もし、たおれたら、これからさきのたのしいこと、うれしかったこといえることができなくなるから、せかいじゅうのみんなが、ニコニコえがおで、いてほしいです。この絵のように、やさしさいっぱいせかいに、なってほしいなと、おもいます。

【評】いただいのちを何よりも大切に！世界中がニコニコ笑顔に！強い願いが伝わってきます。

毎日小学生  
新聞賞



【評】日本一の富士山。高く、美しく、ゴミのないきれいな山だから。ですが、きれいな山にするのは、私たちの努めです。

毎日  
新聞社賞

富士山がキレイな理由  
林 優太郎  
神奈川県 相模原市立鶴野森中学校2年

### ◎審査委員(敬称略)

- 有田和正 (東北福祉大学教授)
- 増井久輝 (環境省総合環境政策局 環境教育推進室室長補佐)
- 角屋重樹 (国立教育政策研究所 教育課程センター基礎研究部長)
- 末吉潤一 (全国小中学校環境教育研究会会長/東京都江戸川区立西小岩小学校校長)
- 朝岡幸彦 (日本環境教育学会事務局長/東京農工大学大学院農学研究院教授)
- 児島邦宏 (東京学芸大学名誉教授)
- 小川 一 (毎日新聞社「教育と新聞」推進本部長)
- 小林一光 (教育出版株式会社取締役社長)

東京都

東久留米市立第九小学校

学校賞

静岡県

常葉学園大学教育学部附属  
橋小学校

# 入選作品



## 世界に一匹のトラ

佐々木 開基

広島県 東広島市立河内小学校5年

ぼくは、ぼくが好きで、絶滅危惧種のトラをかきました。

ぼくは、この絵の「世界に一匹のトラ」にならないように、大切にしていきたいです。

また、トラだけではなく、他の絶滅危惧種や絶滅危惧種ではない物も大切にしていきたいです。



## 地球と私の大事なベゴニア

高根沢 優奈 東京都 荒川区立瑞光小学校6年

「風に乗って種は運ばれて来たのかな。」

昨年からお家の横に、植えてもいないのにベゴニアの花が咲くようになりました。花が咲いていることに気付いたときはプレゼントをもらった様にとでもうれしかったです。昨年は二ヶ所、今年で四ヶ所咲きました。

私はベゴニアの花が沢山咲くようにお世話をしています。お世話をしているうちに地球の土がお花にはとても大切なことを改めて気付きました。私だけが育てているのではなく、地球と一緒に育ててくれているんだと思います。地球と私の大切なベゴニアになりました。

「ベゴニアの花が増えたら地球も喜んでくれるよね。来年がまた楽しみだね。」



## うみのせかい

高橋 佳新 台北日本人学校 小学1年

ぼくは、さかながおよんでいるのを見るのが大好きです。せかいじゅうのうみにすんでいる、うみの生きものをぜんぶみてみたいですね。それには、ぼくたちみんなが、ちぎゅうやうみとともとなかよしになって、いまよりもっともっとうまいにしたいとけいねいとおもいます。

ぼくは、いろいろなうみの生きものがきもちよくすめるうみのせかいでおよびたいです。



## 私の家の暑さ対策

瀬尾 桃香 広島県 尾道市立高見小学校6年

最近、地球温暖化で、夏の暑い日がとても多く感じられました。

でも私のうちは、大丈夫！！

日がっている所には、すだれをして、暑い夏もすずしくなります。

風が入ってくると、日かげになっているのでとてもすずしいです。

これで、暑い夏も乗りきれ！！



## いやしのローソク

大林 桃 大阪府 大阪市立中浜小学校5年

人々の生活に必要なものの一つとして火があります。

今年の3月に東日本大震災が起きて、世の中が節電、エコの大切さを言う中で、私はロウソクがとてもいいと思いました。

なぜなら電気も使わず、地球に優しいものだからです。世界中の人々が知っているロウソクは東北のみんなをふくめ人々の心をいやし続けると思っています。

東北の人々に今までの暮らしにもどれる様になってほしいです。



## ちぎゅうは、つながってる

櫻井 陽子 東京都 荒川区立瑞光小学校1年

83歳の、ながのにすむおじいちゃんと、なつやすみにたくさんおなはししました。あしがあまりあるけません。でもわたしと、おじいちゃんは、ちがつながってます。ちぎゅうのみんなもちがつながっています。だからなかよしです。



## ちぎゅうをみんなでそだてよう

村山 洸太郎 東京都 八王子市立式方小学校2年

ぼくは、2月26日に生まれました。ぼくをうんでくれたのはお母さんです。ちぎゅうが生まれるときは人がいませんでした。そのときちぎゅうは、りっぱなちぎゅうになって人が生まれました。生まれたときはいのちが生んでくれました。そのいのちがいるんな人を生んでりっぱな町ができました。でも町ができてないときは人がちぎゅうの力で町をつくるかと思っていましたがいのちがいるんな人を生んでくれたので、人もがんばらないといけないので人ががんばりました。そうすると町ができました。ちぎゅうもそだてると思ったので、人たちはいつもそだててると思いました。ぼくもがんばらなきゃと思いました。



## ありがとういっぱい、香港おじさん！

齋藤 溪 香港日本人学校小学部香港校4年

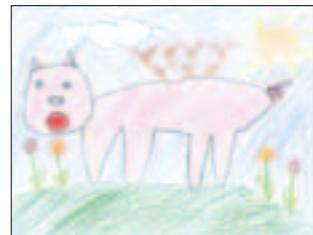
## わたしとブタさん

マニユエル アリサ バトルクレーク補習授業校 小学2年

わたしは、ブタを見たことがあります。たべたこともあります。なきこえをきいたこともあります。ブタはきれいすぎだということを、本で読んだことがあります。わたしは、すこしおどろきました。どうしておどろいたかと言うと、わたしが見ているときには、いつもブタはドロドロみれになっているからです。そんなブタをたべるとは、わたしのおうちではよくあります。ブタ肉になってしまうブタがすこしかわいそうに思います。おばあちゃんのおうちで、ブタの大きななきこえをきいたことがあります。その時に、おばあちゃんが言ったことは「ブタは、お肉になるためにころされてしまうのよ。」と、言っていました。わたしは、ハムが大好きだけれど、ブタをかわいいと、思っているわたしに

は、ブタがハムにされてしまうことがとてもかわいそうだと思います。せっかくブタがハムやわたしたちのおかずになる「お肉」になってくれたのに、ゴミバコにすてられてしまったら、ブタは、すごくかなしみと思います。たくさんブタが、わたしたちの、しょくりょうになるために生まれて、そだてられて、大きくなったら、ころされてしまって、おみせにならべられることになりました。わたしたちはそのお肉をかって、およろいをして、たべます。きっとブタは、のこさず、ゴミバコにすてることがないようにたべしてほしいと思っています、わたしは思うので、のこさずたべます。そして、ブタによるこんでもらいたいと思います。

「ブタさん、ありがとう。」





### 一緒に植えた宝物

郡司 みのり パンコク日本人学校 小学6年

私達の生活や産業が地球温暖化に大きな影響を与え、世界中で自然災害が起き、特にアジア地域での洪水の被害が大きいと聞きました。

私は、その事を知り誰かが何かをしてくれる事を待つのではなく、私自身が今出来る事をしようと、今年の夏、タイのラノーンでホームステイをしながら植林活動に参加しました。マングローブの森で村の学校に通う女の子、ジーンちゃんとお会いし私は、言葉もなく自然と一緒に苗木を植え、気付くと手を繋いでいました。

お互い国も言葉も違うけど、自然を守る心に国境はなく、地球が幸せであります様だと思う気持ちが二人を繋いでくれたのだと思います。

一緒に植えた沢山の苗木が、大きく、大きく育ちますように。



### リサイクルをしよう

金子 裕菜 東京都 府中市立府中第六小学校4年

わたしは、夏休み中にたくさんのリサイクルマークを集めました。集めたリサイクルマークはきちんと分べつできた日に、一まいずつ画用紙にはりました。三つのふうせんの形にはって、きれいに作れました。夏休みが終わっても、たくさん分べつやリサイクルをしようと思いました。



### みんな 仲間だよ！！

吉原 愛実 広島県 尾道市立高見小学校6年

向島には、たくさんのにら犬がいる。そののにら犬たちは、捨てられるために生まれてきたのだろうか。のにら犬が犬をかむとか、畑を荒らすとか、問題になっているが、それは犬のせいではなくて、捨てた人間がいるからなんじゃないかな。私の家の風太も周りの飼われている犬は大切にされている。犬も人間も同じ地球で生まれてきている仲間なんだから、物みたいに自分の勝手に犬を捨てないでほしい。犬もかけがえのない命を持っているのだから。



### 小さな芸術

永田 理紗 ART-N エコクラブ 中学2年

初夏の海岸、ハマヒルガオなどの海浜植物が生える見慣れた光景の中に、初めてみる「美しさ」に驚き、足を止めた。

そこにはカリフラワーに似た白い花の周辺に、小さいけれど不思議な形をした別の花が咲いていた。

今まで何度も海岸を訪れていても、ハマボウフウの「雄花」の存在に気付かなかった。

身近に感じていた植物の、繊細で美しい姿を発見したと同時に、人間には作り出せない自然のもつ美しさに感動した瞬間であった。



### わたしのすきな秋のせいざ

菅原 由子 東京都 台東区立根岸小学校2年

わたしはほしが大すぎです。でも、東京ではあまりほしが見えません。七月におきなわに行きました。くらい空にほしがたくさんあってキラキラかやいていました。東京にかえるとやっぱりほしは見えません。どうしたらほしは見えるのかなと、かんがえました。空気をきれいにすれば、ほしは見えると思いました。なぜなら、おきなわの空気のほうがきれいだと思うからです。

東京も、おきなわのように空気をきれいにして、ほしが見えるようにしたいです。そうしたら地きゅうもきれいなほしになると思います。ごみをおとさず、そうじをする。このようなことをすれば地きゅうもよるこんでくれると思います。



### うちでよかったね

加藤 咲枝 神奈川県 エコクラブ オニオンクラブ 小学4年

庭のレモンの木で、セミが羽化しました。

殻から出たばかりのセミの羽は、緑色の筋で湿った感じでした。

色がだんだん黄色くなって、3時間後は飛んで行きました。

根元の土には、1cmぐらいの穴が開いていました。

日にちが経つにつれ、穴の数は増えていきました。

近所の中学生のお姉さんが、朝部活に行くとき「セミの幼虫（茶色の）が道路を歩いていた！！」と言っていました。

それを見た辺りは、去年みかん畑を宅地にしたところです。

きっと木を探していたのだらうと思います。

私は、レモンが大好きです。レモンの木を大切に育てて、うちの庭に眠っているセミが安心して羽化できるようにしたいです。



### やさしさも すごさも ちきゅうの力

植村 香純 香港日本人学校小学部香港校2年

夏休みに日本のおばあちゃんのいえで、じしんを体けんしました。ホンコンはじしんがないので、こわかったです。

じしんがあっても、花や虫は元気でした。ちきゅうの力はすごいと思いました。

自ぜんも空もきれいなままのちきゅうにしたいです。



### 「昔」から「今」へ

伊藤 明日香 ロッテルダム日本人学校 中学2年

これは世界遺産にも指定されたオランダ・キンデルダイクの風車の写真です。ここオランダではこのような昔の風車がたくさん残っています。昔の人々は風の力を利用して、粉をひいたり、水を汲み上げたりしていました。オランダの1番古い製粉用の風車は、今から約570年も前に建てられました。エジプトの古い記録によれば、風車は3000年以上も前から利用されていたそうです。つまり、人間は3000年以上も前から「風」というものを計算し、その自然のエネルギーを活用したのです。

現在、オランダにはたくさん風力発電用の風車があり、回っています。オランダの人々は昔の技術を大切に、今に伝え、自然と共に生きているのです。



### おんだん化から地球を守れ

岩間 響 東京都 府中市立府中第六小学校4年

わたしたち、人間は地球に、穴をほり色々な自ぜんはかいをしています。

でもそれを全部止めることは、できません。その理由は生活に必要なからです。でも必要だからといって自ぜんはかいをやっていいというわけではありません。でもそれを全部止めることはできません。だったら、できる事から、やればいいのです。たとえばつかわないコンセントはこまめにぬいたり、つかわないしゅうめいは、こまめにけすなど色々なことが出来ますね。

はじめてうちゅうに飛びたったガガーリンは地球は青かったと言っていました。でも、近いようらいには、地球は黒かったなどをいわれないようにがんばっていきましょう。



# 地球となかよし ゼミナール



子どもたちのメッセージに学ぶ

「地球となかよしメッセージ」には、学校を挙げての取り組みもたくさん寄せられます。今回は、「学校賞」を受賞した東久留米市立第九小学校の環境教育を紹介します。

## 翔んでいけ！どこまでも続く青い空へ

### 「ヤゴ救出大作戦」

湧水が流れ、緑豊かな東久留米市。東久留米市立第九小学校は、市の西南部に位置し、学区には多くの公園があります。

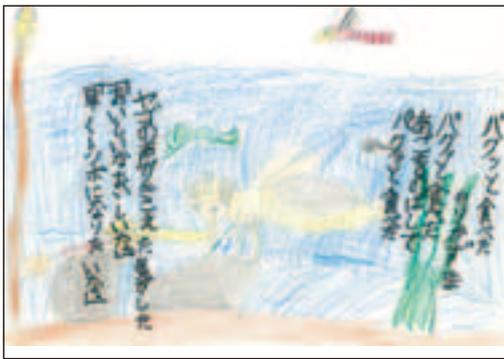
夏の間は成長したコノシメトンボは、秋になるとプールに卵を産みます。卵のまま越冬し、春に孵化します。プール開きとなる六月、九小では毎年三年生が「ヤゴ救出大作戦」を行っています。地域の方をゲストティーチャーとしてお招きし、事前授業ではヤゴの採り方や飼育の仕方、ヤゴがすみやすい環境について学びます。

「ヤゴ救出大作戦」。今年度は、二百匹以上を救出しました。ペットボトルを工夫した水槽で、一人二匹ずつ育てていきます。初めは、「ヤゴは、怖くて触れない」という子や、餌となる赤虫を「気持ちが悪い」という子もいました。しかし、ヤゴが生きていくためには、生きている赤虫を与えなければならぬし、水を替えるためには、ヤゴを水槽の外に出さなければなりません。友だちと協力し合いながら育てることで、「虫は苦手」と話していた子どもたちが、自分で赤虫をとってヤゴに与えるようになりました。

子どもたちは、とても興味深くヤゴの様子を観察しました。ヤゴは、下顎をシヨベルカーのように伸ばして餌を捕らえます。森一馬君の「あごをのばして／パクッと食

べた」という表現は、まさに捕食の瞬間を表現したものです。子どもたちは、意欲的に観察カードに記録していました。

七月に入ると、羽化が次々と始まります。自分のヤゴに羽化の兆しが見られると、子どもたちは待ち遠しくてしかたありません。羽化して、教室の窓から外へ逃がすとき、「元気でね」「また、プールに卵を産んでね」と声をかけていました。しかし、なかには羽化まで至らないヤゴもたくさんいます。共食いをして死んでしまうヤゴや、羽化の途中で力尽きてしまうヤゴ、羽化がうまくいかずに羽が小さくて飛べないヤゴもいました。深津京佑君の作品に代表され



パクッと食べた ● 3年 森 一馬



ヤゴとトンボ ● 3年 深津 京佑

東京都  
東久留米市立第九小学校教諭  
材木 優佳

るように、子どもたちはシヨックを受けません。餌が足りなかったのだろうか、それとも、気温が高すぎたのだろうか。凶鑑で調べたり、ヤゴ採り名人の方に聞いたりして調べます。

三年生九十名がそれぞれの思いを詩と絵で表現しました。この活動を通して、子どもたちは、自然の大切さを実感し、また自然の厳しさを学びました。子どもの頃に自然と触れ合い、自然を身近に感じることで、環境に対する意識が高まると思います。

この子どもたちが大人になったとき、この詩に込めた思いが少しでも地球に届いていることを願っています。

## 受験

### だいじょうぶ, だいじょうぶ



香山 リカ  
(精神科医・立教大学教授)

精神分析の産みの親、フロイトが、「誰もが見る強い不安の夢」としてあげたのは、「受験で失敗して落ちる夢」。つまり、百年以上も前のヨーロッパでも、受験は多くの人にとってたいへんなプレッシャーだったわけだ。しかも、その緊張や不安は、受験が終わった後もいつまでもその人を苦しめる可能性がある、というのだから、受験がどれくらい心にとって負担になるものなのかが想像できる。

だとしたら、おとなが受験生である子どものためにできることは、「受験のストレスが少しでも小さくなるようにサポートしてあげること」なのではないだろうか。わかりやすく言えば、「がんばりなさい」ではなくて「無理しないでね」と、「これで失敗したらおしまいよ」ではなくて「まあ、チャンスは何度でもあるよ」と声をかけること。「そうか、受験って、私の人生の中ではそれほど大したことじゃないんだ」と子どもが感じて、なるべく気を楽しにして試験にのぞめるようにすることだ。

「そんなことをしたら、気がゆるんで実力が発揮できないじゃないか」と心配する声も聞こえて



イラスト くらた くらた <http://koreamitene.or.jp/~twins7yh/>

きそうだが、いくらおとなが「気楽にね」と言ったとしても、試験が近づくと学校や塾は自然にピリピリムードになるし、試験会場に行けば誰もが「よーし、がんばるぞ」と背筋を伸ばすものだ。それに、誰もが経験するように、過度な緊張は、かえって実力の発揮を妨げる。「まあ、たとえここでうまく行かなくても、私の人生は心配ない、だいじょうぶ」と自分を信じて肩の力を抜くほうが、ずっとよい結果に結びつくのは間違いない。

では、万が一、期待通りの結果が出なかった場合、おとなはどうすればいいのか。そこで「悔しいのはママのほうよ」などと言って、感情的になるのは感心できない。そこまでがんばった子どもを十分にほめて、「きっとあなたは、あの学校に行かないほうが自分らしくいられる、ってことね。春からどんなことが待ってるんだろうね」とあくまで結果を前向きに評価し、変更した進路に対して期待を抱けるようにしてあげたい。

だいじょうぶ。結果がどうであっても、あなたはあなた。おとなができるのは、そう声をかけることに尽きる。☺

## 音楽のおくりもの vol.1

東日本大震災 復興への願いを込めて



子どもたちのメッセージが、合唱曲になりました。

子どもたちの詩によるエール

## みんなはひとつ

- 東日本大震災 復興支援 CD 付き曲集「地球となかよしメッセージ」より
- このピースの収益は、震災復興のための寄付とさせていただきます。
- 定価：1,260円(本体1,200円+税)

【お問い合わせ】 教育出版株式会社 編集総括部 TEL 03-3238-6862

ほっと

な  
出会い



プロゴルファー

## 村口 史子さん

東京都出身。習志野市立習志野高等学校卒業。1985年、研修生として千葉カントリークラブに入社。1990年、プロテスト合格。1991年初優勝。1999年には賞金女王を獲得するなど活躍。2004年、ツアー競技引退。現在、ツアー解説者やリポーターとして活動中。千葉テレビ放送「村口史子のグッドゴルフ」に出演中。

何かに打ち込みたい、と願いつつ

ゴルフを始めたのは、高校を卒業して就職してから、知人に勧められたからです。最初は全く興味がなかったんですが、練習場に行ってみて、止まっているボールなのに、全然クラブに当たらないことにびっくりしました(笑)。当たるように続けてみよう。それが始まりです。

その練習場に、プロを目指している研修生の女性がいきました。私より4、5歳年上だったんですが、野球などの他のスポーツと違って、ゴルフは大人になつてからでもプロを目指せるのかと、目から鱗が落ちた感じでした。

私は、小さいころから「自分で何かやりたい」という思いが強かったんです。高校時代は、最初はバレーボール部に所属していて、大学に進学して先生になり、バレーボールを教えたいと思っていました。でも、練習のやり方や、自分の力不足などに悩んで、やめてしまったんです。

挫折でした。その後、就職しようとしたときには、第一希望の会社に落ちて、また挫折です。他の会社へ就職したんですが、自分には何が向いているのかわからない、でも何かしたい。そんなときに、ゴルフに出会い、大人になつてからプロを目指す人の姿に、これだ、と。自分もプロになりたい、ゴルフに真剣に打ち込みたいと考えたんです。

決断して、前へ前へ

自分で決断して、もしそれがうまくいかなかったら、また考え直して、次のプレーに挑む。これが、ゴルフというスポーツの醍醐味ですね。プロゴルファーは、常に先を見てプレーしなればなりません。一打に集中して、もしミスショットをしても、次、次と切り替えていかなければいけない。ですから、プレー以外でも、プロゴルファーは、後ろを振り返るより、前を

見据えた生き方をしている人が多いと感じます。自分がどうなりたいか、どうしたいか。ミスをしたとしても、次をどうするか考えて、先へ進むしかないんです。

ゴルフは、始めるきっかけがなかなかつかめなと思うので、学校で、社会人講話の一環でも体験の機会をつくれればな。そこから興味をもってくれば、才能のある子がぎつと出てくると思います。女子プロ協会にも、意欲的な人がたくさんいますから、喜んで講師として行くと幸いですよ。

「やりたい」「やってみよう」を大切に

「やりたいこと」って、常に見つけたいと思っていないと、見つからないと思うんです。今の子どもたちは、情報が多すぎて、かえって迷いも大きいかもしれない。ですから、何でも「とりあえずチャレンジ」することが大切だと思います。向かないと思えばいつでもやめることはできます。考えてばかりで、やらないと始まらない。とにかく何かやってみる気持ちを大事にしてほしいですね。

人生、何でもうまくいくわけではない。でも、それも自分で選んだこと。その決断を後悔せず、次のステージを考えて進めばいいんです。子どもたちには、そういう気持ちをもってほしいし、親御さんや先生には、子どもたちの自発的な「やりたい」という気持ちを大切にあげてほしいなと思っています。自分に向いていることって、みんな、必ずある。それを自分で見つけられるようにしてあげてほしい。これをしなさい、と与えるのではなく、子どもが、自分でどうやったらできるようになるかということも考えさせる。そんな環境をつくってあげられたらいいのではないかと、私は考えています。

## Educo Salon

前号について寄せられたご感想です。

◆地球となかよしトピックス。長岡京市立神足小学校の「手作りLED街灯」、学校と地域の人々の連携から、こんなにすばらしい取り組みが生まれていることに驚いた。子どもにとって、学校の先生だけが先生ではない、教室だけが学びの場ではないことに改めて気づかされた。(京都府砂田信夫)◆巻頭インタビュー、さとう宗幸さんの言葉が印象的。「夢をしっかりとって一歩一歩、歩き続けていけば、100%、必ず報われる」。「聴く人に言葉が伝わる」を歌い手としての絶対条件として、いかにわかりやすい言葉で、いかに聞き手の心に情景や思いがイメージされるかを大事にする姿勢に感銘を受けた。(茨城県 R・T)◆「教育NOW」の、学校の危機対応「地震防災」(板橋区立高島第一小学校)は、どの校種でもモデルにすることができる実践だ。子どもたちが自ら判断して行動できる力を身につける指導・訓練を続けたい。(北海道 飛鷹保廣)



## なかよし宣言

わたしたちをとりまく自然や社会は、科学技術の進展や国際化、情報化、高齢化などによって、今、大きく変わろうとしています。このような社会の変化の中で、人間や地球上のあらゆる命のびのびと生きていくためには、人や自然を大切にしながら、共に生きていこうとする優しく大きな心をもつことが求められています。

わたしたちは、この理念を「地球となかよし」というコンセプトワードに込め、社会のさまざまな場面で人間の成長に貢献していきます。